

## 復讐と埋葬

——魯迅「鑄劍」について——

丸尾常喜

### 一 復讐の文學

一九二六年十月十四日の夜、魯迅は厦門大學の宿舍で、この年に書いた雜文二十六篇を集めた『華蓋集續編』を編みおわり、次の八句をその末尾に記した（『華蓋集續編』校訖記）。

この半年私はまた多くの血と多くの涙を見た。  
しかし私にはただ雜感あるのみ。

涙はぬぐわれ、血は消えた。

殺人者たちは思うままにのさばる。

鋼の刀を用いた者も、軟らかい刀を用いた者も。

しかし私にはただ「雜感」あるのみ。

「雜感」まで「行くべき所に入れられ」てしまったとき、

私にはただ「のみ」あるのみ！

翌年四月八日廣州の黃埔軍官學校で行なつた「革命時代の文學」と題する講演の冒頭でも、魯迅は同様の感慨を述べている。私から文學の話をお聴きしたいと考えている諸君に役立つようなことは何も話せない。

復讐と埋葬

この數年北京で得た經驗は、私の文學にたいするこれまでの考えをしいだいに疑わせるようになった。北京政府が發砲して學生たちを殺し、言論弾壓も厳しくなつたとき、私は考えた、文學というのはいちばん役立たずの者のやることだ。實力を持つ者は黙つて人を殺す。ひとことふたこと發言しただけで殺されてしまう。幸いに殺害を免れて、毎日叫びをあげ、苦しみを訴え、不平を鳴らしても、實力を持つ者はやはり壓迫し、虐待し、殺戮をつづける。彼らをどうすることもできない、そのような文學がはたして何か役に立つだろうか、と。

むろんこの講演で魯迅が文學の話をしなかつたわけではなく、むしろ文學論としてきわめて重要な指摘がなされているが、ここでは彼が「大革命」の前に「反抗」と「復讐」の文學が現われることを論じた部分に注意しておきたい。魯迅は、「大革命」の前には多くの民族で社會の現状にたいし苦痛を叫び、不平を訴える文學が出現するが、そのような文學しかないとき、その民族にまだ希望はない。ある民族は苦痛を訴えても役に立たないために、訴えるのもやめてしまい、沈黙の民族となり、しだいに衰えていった。だが一方、反抗心の豊かな、力のある民族は、目ざめて、悲哀の聲を怒りの叫びに變えた。革命が爆發する時代が近づくと文學はいつも憤怒の聲を持つようになり、反

抗と、復讐の文學が生れる。ソビエトロシア革命が起こる前に、この種の文學が起つた、と述べている。

魯迅の「鑄劍」は『故事新編』に収めた作品の末尾の記載によれば一九二六年十月の作であり、『故事新編』序言（一九三五）にも、『奔月』と「鑄劍」の發表時は「肩間尺」と題す——を書いたばかりで、私は廣州へ移つた」とあるところから、ふつうは作品末尾の記載を信ずべきであろうが、『魯迅日記』一九二七年四月三日の條に「『肩間尺』を書き終る」（『肩間尺』は『肩間尺』の書き誤り）とあつて、議論を呼んできた。今では、作品の構想は厦門で立てられ、途中まで書いたところで、廣州に移り、全體は日記の記載どおり一九二七年四月三日に完成したのであらうとするのが、もっとも考えやすい説である。だが篇末に記された一九二六年十月も、『故事新編』を編集したさいにあまりまいな記憶によつていいかげんにつけられたものというより、「鑄劍」の構想の成立に何らかの重要な意味をもつものとして魯迅の記憶にあつたという可能性がつよい。つまり、魯迅が十月十四日に『華蓋集續編』を編みおわつて『華蓋集續編』小引」と「校訖記」と添え書きされた先の八句とを書き、三十日に日本留學中に文言で書かれたものを含む一九二五年までの評論二十三篇を収める『墳』の「題記」、翌月十一日には『墳』の後に記す」を書いた、そのような大きな心の動きが彼に「鑄劍」を書かせたのであり、それが廣州行きの決断や「奔月」の執筆（十二月）によつて一時中断され、翌年廣州で再開されて四月三日に完成を見たとき考へる方がより現實にちかいかと思われる。

魯迅における「復讐の文學」は、一九二五年から魯迅自身をその渦中に巻きこんで激しい展開を見せた中國現代史の流れの中で、小説「鑄劍」に結晶した。中國の歴史は、「奴隸になりたくてもなれない時

代」と「しばらくのあいだ平穩に奴隸でおれる時代」の循環にはかならなかつたという鮮烈な歴史認識を示し、青年たちにそのいづれでもない、まったく新しい時代を創造するよう呼びかけた有名な評論「灯下漫筆」（一九三五年四月）の中で、魯迅は「時の日曷か喪ぶる、子汝と偕に亡びん」（『時日曷喪、子與汝偕亡』）という古語を引いている。『尚書』「湯誓」に典拠をもつこの語はやや文字を變えて、『孟子』「梁惠王上」の孟子の言葉の中で引かれている（『時日曷喪、子及汝偕亡』）。その代表的な解釋を朱子の『孟子集注』によつて見てみよう。「日」を孟子は夏桀を指すものとする。朱子はそれを受けて、「桀嘗て自ら言えり、吾の天下を有するは天の日を有するが如し、日亡びて吾乃ち亡ぶ」と。民その虐なるを怨む。故にその自ら言えるに因りて之れを目して曰く、この日何時か亡びん、もし亡べば則ち我むしろ之れと俱に亡びん、と。けだしその亡ぶるを欲すること甚しければなり」と解する。「湯誓」の一語は、より主體的にとれば暴君を亡ぼすためとあれば、われもともに亡びて可なりとする古代人民の暴君にたいする怨恨と相討ちの思想を語っている。しかし、「灯下漫筆」は、この語を引きながら、次のように述べている。

「時の日曷か喪ぶる、子汝と偕に亡びん」というのは憤激の言に過ぎない。實行を決心した者はあまりないのである。實際はおおむね群盜麻の如く起り、混亂が極點に達したのち、一人の比較的強い、あるいは比較的利口な、あるいは比較的狡猾な、あるいは異民族の人物が現れ、比較的秩序正しく天下を收拾することになる。そして改めて規則が定められる。どのようにに役務に服し、どのようにに租税を納め、どのようにに叩頭し、どのようにに聖人を頌えるか。その上これらの規則は今ののように朝三暮四ではない。そこ

で「萬姓ともに歡び」、成語でいう「天下太平」となるのである。孟子のいう「一治一亂」(『孟子』「滕文公」)は、このようにして、先の二つの時代の循環、言葉を変えていえば「これまで『人』の價値をかちとつたことのない歴史」ととらえられたのであるが、魯迅の現状認識は、對立を鮮明にしてくる北京女子師範大學の紛争、やがて上海に發して全國に廣がった「五・三〇事件」の波動、女師大闘争の勝利、國民革命の進展、「三・一八事件」とつづく歴史的事件の直接、間接の體驗によつてしだいにその基調と色彩を変えていく。「灯下漫筆」の一週間後の文章には早くも次のような言葉が見られる。

われわれは呻き、嘆息、哭泣、哀願の聲を聞いても、驚くにおよばない。酷烈な沈黙を見たとき、氣をつけないなければならない。何か毒蛇のように屍の林の中にうごめき、怨鬼のように暗闇の中を走るときは、もっと氣をつけないなければならない。それは「眞の憤怒」の到來を豫告しているからである(『雜感』、一九二五年)。

北京女師大の闘争は、學生たちのたたかひと魯迅を含む教員グループの支援に新しい政治變化が加わり、十一月末には、臨時校舍によつて授業を維持してきた學生たちが本校に歸還、やがて新しい校長が赴任して勝利のうちに終る。八月教育部長章士釗によつて教育部會事を解任、免職され、裁判闘争に訴えていた魯迅も翌一九二六年一月に復職令が出て事實上の勝利を収める。しかし、三月、「國民革命」の影響を受けてしだいに國民黨に接近しつつあった馮玉祥の國民軍と日本の後押しを受けた張作霖軍との紛争に、日本が介入して紛争が國際化し、列強八か國が段祺瑞政府に國民軍の撤退を要求する最後通牒を發し、それに抗議する北京市民、學生の請願デモに政府の軍警が發砲、死者四十七人、負傷者百五十數人を出すと「三・一八事件」が起

きる。このときの犠牲者に北京女師大の敬愛子二人も含まれており、魯迅は怒りで數日食事ものを通らず、話もしないほどの衝撃を受ける。魯迅自身も官憲のブラックリストにあげられ、八月には新しい生活を廈門にもとめることになる。事件の當日書きかけの文章に「墨で書かれた虚言は、血で書かれた事實をおおいかくすことはできない。血の負債はかならず同じもので返さなければならぬ」(『花なきバラの』)と書き加えた魯迅が、犠牲者の一人劉和珍を記念する文章の筆をとつたのは四月一日であった(『劉和珍君を記念する』)。それは「息をすることも、目や耳を開くこともできぬほど」の悲憤の中で、言葉によつてようやく身をささえ、立つて現實に對峙する魯迅の姿をとどめて、二十年代中國散文の一つの極を示している。そして私たちが「このような世界はいつ終るのであるうか」という呻きのごとき言葉の中に見出す次の一文は、魯迅における「復讐の文學」が、中國古代の復讐譚「眉間尺物語」に題材をもとめるにいたつた必然性とその基本的なりゆきを語っている。

私はもともと中國人をもつともひどい悪意で推測してはばからぬ者だ。だが、今回は意想外のことがいくつかあった。一つは當局者がこのように残酷であり、一つは流言家がこのように卑劣であり、もう一つは中國女性が難にのぞんでこのように従容としていたことだ。私が中國女性の仕事ぶりを見たのは去年からのことだ。少數ではあるが、その確實で決然とした仕事、最後までやりぬく氣概に、しばしば感嘆したものだ。今回、彈雨の中で助けあひ、身を挺して死を恐れなかった事實は、陰謀と計略によつて數千年にわたつて抑えつけられてきたにもかかわらず、中國女性の勇氣がいつに消滅しなかつたことを證明するに足るものだ。

前年すなわち一九二五年の一月一日に書かれた散文詩「希望」は、「身中の青春」を失った自分のたずねあてるべき「身外の青春」の喪失におどろき、ならば自分の「身中の暝暮」を投げつけてでも「暗夜」にいとみつけようという孤獨な意志を述べたものである。北京女師大の鬮争は、「身外の青春」が確實に存在し、成長しつつあることを示すものであった。このような「青春」に加えられた虐殺は、「人間の世ならぬ世」(劉和珍君を記念する)の残酷とともに、それにたまたかいいいどみ、身を挺する「青春」の姿を彼の心に深く刻みつけた。一九二六年十月、彼は時代の大きな轉換の豫感の中で、「眞黒な悲涼」(同)を改めて噛みしめながら、古代人のとどめた相討ちの物語に新しい生命を吹きこむ「鑄劍」の構想をかためていったと思われる。

## 二 眉間尺物語

「鑄劍」(最初雜誌『弄原』二卷八、九期「一九二七年四月、五月」に發表されたときは「眉間尺」と題す)の典故については、魯迅は徐懋庸の質問に答えて、「鑄劍」の典故についてはすっかり忘れてしまいました。原文はだいたい二、三百字だったことだけおぼえています。私は配置を定めた(鋪排)だけで、變えてはいません。唐宋の類書か地理書(その「三王塚」の條)にあつたかもしませんが、調べようがありません(一九三六年一月十七日付書信)と答え、増田涉には『故事新編』の中に「鑄劍」は確かに割合に眞面目に書いた方ですが、併し根據は忘れて仕舞ひました、幼い時に讀んだ本から取つたのだから。恐らく『吳越春秋』か『越絶書』の中にあるだろーと思ひます。日本の『支那童話集』之類の中にもある、僕も見つたことがあつたとおぼえて居ます(同年三月二十八日付書信、原文日本語)と告げている。このうち『吳

越春秋』の現存本は「闔閭内傳」で吳の刀工干將とその妻莫邪が力を合わせ二口の劍をつくる過程を述べ、同じく『越絶書』は「越絶外傳記寶劍」に名工干將と歐冶子が楚王のため三口の劍をつくつたことを記すのみで、眉間尺の物語ではない。『支那童話集』は、藤井省三氏によつて、池田大伍編『支那童話集』(東京・富山房、一九二四)のことであり、そのなかの「眉間尺」は「楚王鑄劍記」(明桃源居士編『五朝小説』所收。作者を後漢の趙曄とするが假託である。本文は今日の『搜神記』二十卷本に收めるものに同じ)にもとづく童話であることが明らかにされている。<sup>2)</sup>『魯迅日記』によれば、魯迅は一九二五年八月十一日にこれを購入している。

「眉間尺物語」を傳える文獻は、佛家故事を集める唐代の類書『法苑珠林』卷三六に『搜神記』に出る一編、宋代の類書『太平御覽』卷三四三「兵部」に『烈士傳』と『孝子傳』とに出る二篇が收められているのが代表的なものである。この三篇は長短の差はあつても、物語の基本的な構造は一致する。いちど散逸したものが明代に改めて輯録された『搜神記』二十卷本所收のものは、『法苑珠林』から取つたものと考えられる。また『太平御覽』に收める『烈士傳』の一篇の文末には「列異傳」は、莫邪楚王の爲に劍を作り、其の雄なる者を藏す、<sup>3)</sup>といひ、『搜神記』も亦た楚王の爲に劍を作る、といひ。餘は悉く同じなり」といふ割注があるところから、魯迅は『古小説鈎沈』に『列異傳』佚文を集めるにあつて、この『烈士傳』に出るとされる一篇の「晋君」を「楚王」に、「其の雄なる者」を「留む」とあるのを「藏す」に改めて、これを輯録している。だが「餘は悉く同じ」とあるにもかかわらず『法苑珠林』所録の『搜神記』に出るとされる一篇は、『烈士傳』のものとは異なる。すでに述べたように現存の『搜神

『記』二十卷本中の一篇は、もともとこの『法苑珠林』に輯録されていたものと同一であり、また『中國小説史略』に『搜神記』二十卷本に關する論及とそこから引用が見られるところからも、魯迅の視野にはいつていたテキストであることに變わりはない。このほかに金の王朋壽が唐の于文政の『類林』に増補を加えた『類林雜說』卷一「孝行篇」所録の『孝子傳』に出るとされる一篇がある。これは『搜神記』の一篇よりも詳しく、細谷草子氏によって『鑄劍』の直接の素材となつたと考えるのがもつとも適當であるとされる興味深いテキストである(『魯迅日記』一九三三年一月五日の條に上海の三弟周建人より送られてきた記事が見える)。「鑄劍」の素材を考えるには、いに細谷氏のこの指摘はきわめて重要な意味をもつものであつた。ただ私自身は、しいて直接の素材を限定したり、底本を定めたりするのではなく、以上の四篇と池田大伍の「眉間尺」がすべて魯迅の視野にはいつていたことを確認しておけば足りるだらうと思ふ。ここでは「眉間尺物語」の概要を、『法苑珠林』に輯録され、『太平御覽』所録の二篇よりすぐれてい『搜神記』「三王墓」の梗概によつて示すことにしたい。

楚の刀工の干將莫邪は、楚王に命じられた劍をつくるのに三年かかつた。王に殺されることを豫感した刀工は、雌雄二口のうちの雌劍を隠し、雌劍だけを持つて王のもとに出かけた。占いによつて雌雄一對であることを知つた王は、刀工を殺した。遺腹の子赤比が成長したとき、刀工の妻は父親の遺言を傳へ、隠されていた雌劍を掘りだした。赤比は日夜、復讐を思つた。

王はある夜、自分を討とうとする眉間の廣さ一尺もある男兒の夢を見、千金を懸けて彼を探索した。赤比が山に逃れて歌を歌つてゐると、一人の旅人(客)が通りかかき、わけをたずねた。赤

比が自分の志を告げると、旅人は、「そなたの首と劍をくれるならば、仇を討つてやろう」といふ。赤比はすぐに劍で自分の首を刎ね、首と劍を兩手に持つてさし出し、「そなたを裏切りはしない」といふことを聞いて、はじめてどつと地に倒れた。

赤比の首を持つていくと、王はおおいに喜んだ。旅人は大釜を用意させ、赤比の首を煮えたる湯の中に入れた。首は三日三晩たつても煮えず、湯の中から躍り上がつては、かつと睨みつけた。「うまく煮えませぬ。王がもつとそばによつてごらんになれば、かならず煮えましよう」王が近づくと、旅人はさつと王の首に劍をあてた。王の首は湯の中に落ちた。旅人も自分の首に劍をあてた。三つの首は煮え崩れて、どれが誰だか區別がつかなくなつた。臣下たちは煮え崩れた肉を三つに分けて葬つた。これを三王墓といい、今汝南の北宜春縣の縣境にある。

魯迅の「鑄劍」では、赤比は「眉間尺」とされ、干將莫邪は名を記さず、楚王も單に「國王」とされている。作品全體の構造は、眉間尺と旅人(黒い男)とよばれている)が唱う奇怪な歌が挿入されているのは、ほとんど以上の大筋をそのまま踏襲している。ただいくつか部分的に他の傳承に出自をもつ場面が見られる。

それは第一に、國王が眉間尺の父に劍づくりを命じたのは、王妃が鐵柱を抱いてみごもり、眞青で透明な鐵塊を生みおとし、國王がこの「異寶」を用い、一口の劍をつくらうと考へたためであるとする。第二に、鼎の中の眉間尺と王の首とが單に煮えくずれるだけでなく、その間にはげしい噛みあいが行われ、眉間尺の不利を見た黒い男が自分の首をはねてたかいたに加わることである。

この二つの素材となつたと見なされる傳承は、次のとおりともに

『類林雜說』所録の『孝子傳』『眉間尺』に見出される。

(1) 楚王夫人、嘗て夏に涼を取りて鐵柱を抱く。心に感ずる所有り。遂に懷孕し、後に一鐵を産む。楚王莫邪に命じて、此の鐵を鑄して双劍を爲らしむ。

(2) 二頭相噛む。客眉間尺の勝たざるを恐れて、乃ち自ら復た劍もて頭に擬す。頭復た鑊中に墮ち、三頭相敵む。

この點が細谷氏が『類林雜說』の『孝子傳』佚文をもつて「鑄劍」の直接の素材と考えられるもっとも大きな根據である。(1)は『琅邪代醉篇』(明張鼎思撰)や『事物鏡原』(清陳元龍撰)「武備類」に引く『列士傳』佚文、(2)は『太平御覽』卷三六四に録する『吳越春秋』佚文にも見え、特に後者は當然魯迅の視野にはいつていたものであるが、確かにともに『類林雜說』によるべくしてよつたものと考えられる。

しかし、「鑄劍」には『類林雜說』の一篇には見えず、『搜神記』中のものには見える傳承によつた重要な場面がある。それは眉間尺が自分の首を客に與える場面である。『類林雜說』の一文が、「客曰く、子の頭と子の劍を欲す」と。眉間尺乃ち劍と頭とを與う」と述べるのにたいし、『搜神記』のものは、「客曰く、王子の頭を千金にて購むと聞く。子の頭と劍とを得て、子の爲に之に報ぜん」と。兒曰く、幸甚なり」と。即ち自ら刃ね、兩手に頭と劍とを捧げ、之れを奉じ、立僂す。客曰く、子に負かざるなり」と。是に於て屍乃ち仆る」と、眉間尺の主體的な決斷と行爲とが明確に描かれ、彼の復讐の意志と客にたいする信託とが象徴的に示されるきわめて印象的な場面である。

「鑄劍」ではこの場面に、黒い男が眉間尺の仇討ちに參與する動機を語る發言が加えられ、思想の劇としての「鑄劍」のもっとも重要な場面を構成するが、その考察はのちに試みることにし、眉間尺の黒い

男にたいする信託がどのように描かれているか見てみよう。

「けつこうです。だがどうやって仇を取ってくださるんですか」  
「二つの物をくれさえすればいい」二つの燐火の下の聲がいった。  
「その二つとは、よいか。一つはおまえの劍、一つはおまえの首だ」

眉間尺は奇妙な氣がして、すこしためらつたが、おどろきはしなかつた。しばらく口をきくことができなかつた。

「おれがおまえの命と寶物をだまし取ろうと思つてはいけない」暗闇の中の聲がまたつきはなすようにいった。「すべておまえしだいなのだ。おまえがおれを信じるならおれはいく。信じないならおれはやめる」

このあと助勢の動機が語られ、眉間尺は次のように應ずる。

暗闇の中の聲がやむやいなや、眉間尺は肩ごしに青い劍を抜き、そのままうなじにあて前にさつとおろすと、首は地面の青苔の上に落ちた。そして劍を黒い男にわたした。

「カカ」男は片手で劍を受け取り、片手で髪の手をつかんで眉間尺の首を持ち上げ、その熱い、死んでしまつた唇に二度接吻し、冷たいとがった聲で笑つた。

古代人民が結晶させた一つの信託のイメージは、怨恨を純化された復讐精神に昇華させたが、魯迅の精神はよくそれと共鳴し、古代的な簡古の美に新しい生命を吹きこむ表現となつてゐる。

さらに『搜神記』の一文には見られず、『類林雜說』に見出される一つの設定がある。それは、王に獻げられた雌劍が雄劍を憶つて鳴るといふ設定であり、原文は「莫邪は乃ち雄を留め、雌を以て楚王に進む。劍は闇中に在りて常に悲鳴する有り。王群臣に問う。答えて曰

く、劍に雌雄有り。鳴る者は雌、その雄を憶えばなり、と。王大いに怒り、即ち莫邪を收えて之れを殺す」と書かれている。これも他に地理書『吳地記』(唐陸廣徵撰)などにも見ることで、傳承であるが、一見したところ「鑄劍」に同様の設定を見出すことはできない。しかしそれは、この復讐の物語に愛と死の劇をもりこむ重要な柱として黒い男と肩間尺の唱う奇怪な歌の中に埋めこまれており、そのことにはふたたび考察を試みることにしたい。

### 三 黒い男と肩間尺

「鑄劍」は古代の肩間尺物語の大筋を基本的に踏襲しているが、登場人物にはそれぞれ明確な性格が與えられている。王は、敵を殺し、わが身を守るために王妃の生みおとした鐵塊で一口の劍をつくることを刀工に命じる。彼は猜疑心のつよい、残忍な性格で、これを超える名劍をつくらせぬために、刀工をその劍の最初の生贄とする。そればかりか、「鬼魂」がたたるのを恐れて、身と首を前門と後園に分けて埋めた。刀工は精根を傾けて三年鐵を鍛え、三日三晩かけて眞青で透明な、まるで氷のような二口の劍をつくり上げる。運命を豫見した刀工は、妊娠中の妻に子が十六歳の成人のときをむかえたら復讐をさせよう遺言し、雄劍をのこし、雌劍をたずさえて王城へ出向いた。刀工の妻は、女手ひとつで肩間尺を育て、その成人の日に息子肩間尺にすべてを傳える。

肩間尺は、捕らえた鼠を殺すにも逡巡するような、本來氣のやさしい、それ故に優柔な若者として描かれる。彼は遺言を傳えられて、復讐の決意を固めたものの、まんじりともできず、はればったい目のまま王城にやってくる。そして、王の行列に近づこうとしたとき、見物

の人垣の中で何者かに足をつかまれて轉び、その下じきになった若者にいいがかりをつけられ、野次馬に圍まれて動きがとれなくなったとき、突然現われた黒い男にたすけられる。しかし黒い男の申し出を受けると、ためらうことなく自分の首と劍を男に託す。

黒い男は、ひげも髪も黒く、瘦せて鐵のようにだと表現される。黒いひげ、黒い髪のあいだに鱗火(鬼火)のようにけいけいと光る眼、聲は「ふくろうの」ようであったとされている。文字通り「黒い」この男は、「過客」(一九二五)の旅人、「孤獨者」(同)の魏連史の系列に立つ人物である。敬壇に立つ魯迅の姿も、髪、ひげ、服にいたるまで黒いかたまりのようであったという。また彼はふくろうを好み、しばしば自分の文章を人びとから「惡聲」と忌みきらわれる「ふくろうの聲」(「鼻鳴」)にたとえ、その風貌からふくろうという綽名をもっていた。

黒い男はのちに「汶汶郷」の出身で「宴之敖者」だと名のる。「汶汶」は「楚辭」『漁父』の中の屈原の言葉に「安んぞ能く身の察察たるを以て、物の汶汶たるを受くる者ならんや」とあるのに出るが、王逸の注によれば「垢塵を蒙る」の意味であり、潔白を意味する「察察」と對比される。「汶汶郷」は「潔白にして汚辱を受けた地」という意味であろう。「宴之敖者」はもともと魯迅が『侯堂專文選集』題記(一九二四)のために用いた筆名で、宴の字が家・日・女でつくられ、敖の古字が出・放でつくられているところから、日本の女に家を追い出された者を意味し、魯迅が二弟周作人の妻羽太信子の「讒言」によって作人と決裂し、北京八道灣の家を出ることになったことを指している。これらのことは、この黒い男に魯迅自身の自己投影があることを示唆している。そのような作者魯迅の影をもっとも明らかに映し出しているのが、黒い男が肩間尺の復讐に參與する自分の動機を肩間尺に

告げるところである。

「しかしなぜ私のために仇討ちをしてくださるのですか。私の父を知っているのですか」

「おれはずっとおまえの父を知っている。ずっとおまえを知っているように。だがおれが仇討ちをしようとするのは、そのためじゃない。……おまえは、おれがどんなに巧みに仇討ちするか知るまい。おまえのは、おれのだ。あれも、おれなのだ。おれの魂には、他人とおれ自身が加えたたくさんの傷があるのだ。おれはずでにおれ自身を憎んでいる」

男が眉間尺のために仇討ちをしようとするのは、その仇が彼自身の仇でもあるからである。ところがその仇は彼自身でもある。男は復讐者であると同時に仇でもある。彼はすでに彼自身を憎んでおり、彼の仇討ちは仇を滅ぼすと同時に彼自身を滅ぼす相討ちでなければならぬのである。男の言葉は民間話話のもつ骨太い骨格でこの相討ちの思想を語っており、それは讀者のさまざまの思考をさそふものであつても、それによつて作品の自立が妨げられているわけではない。

しかしここではやはり黒い男が生み出されるにいたつた経路を、魯迅の一九二五年以來の思想の動きの中にさぐつてみることにしたい。魯迅は早く一九二四年九月二四日付李秉中あての手紙で彼の自分自身にたいする憎悪を語っている。その自己憎悪は、自分の幸福をねがつてくれる者、自分の滅亡をねがっている者、その兩者のどちらの期待にもそえずただ年齢だけを加えていくことにたいする憎しみであり、そのためしばしば自殺を考え、人を殺すことを思うことが語られている。このような吐露は、彼が「狂人日記」(一九一八)の時代にうちたつた思想、一言でいえば「自分は因襲の重荷を負い、暗黒の闇門を肩

で支えて、彼ら(子供たち)を廣々とした光明の場所に放してやらう。」(「我々は今日どのようにして父親となるか」、一九一九)という有名な言葉で表明された魯迅流の「進化論」が、壁につきあたり、ひび割れを起こしつつあることを示しており、それにもかかわらず彼が「敵」「友」「我」の關係の中で「我」を含む三者の位置をまた定めかねていることを語っている。三者の關係は手應えのない幽暗の中にあり、そこに魯迅の苦惱と寂寞があつたのである。

しかし一九二五年にはいつて「女師大事件」以下一連の事件が魯迅を激しい論争に巻きこむことになつた。論争は彼自身に「魂の荒涼と殺伐」(『華蓋集』題記、一九二五)をもたらししたが、一方自分の文章にたいし「風砂」の中にこけまろび、砂つぶてにたたかれて血を流した「傷痕」と呼んで愛着をも示した。「三・一八事件」の犠牲者劉和珍を記念した一文(前出)は、魯迅の「敵」が「殘酷」な「當局者」すなわち軍閥政府の權力者たち(そこには當局者の一人で雜誌『甲寅』による復古派の文人章士釗も含まれる)と「卑劣」な「流言家」すなわち雜誌『現代評論』による陳源らの「正人君子」とであることを明確に示している。後者は魯迅の目から見て歐米風の新しい装いをこらしているも「傳統の鬼魂」と無自覺な野合をとげている者たちであり、權力をもつ舊時代の代表者たちとの間には本質的に「鋼の刀」と「軟らかい刀」との差しかないのである。そして『墳』の後に記す(一九二六年十一月)では、この評論集の刊行の動機の一つが、「私の文字を偏愛する顧客にいささかのよろこびを與え、私の文字を憎悪する者たちにいささかの嘔吐を與える」ねがいにあることが語られるにいたる。このことは、この二年ほどの間に、魯迅が「我」の生存の根據を「敵」の憎悪と「友」の期待の中に現實的に据えるにいたつたこと、そのよ



うな生の覺悟を得たことを物語っている。

だが上記のことは、そのまま魯迅が自己にたいする憎悪から自由になることを意味しなかった。先に引いた李秉中あての手紙では、彼の魂の中に「毒氣」と「鬼氣」が存在し、それを憎み、取り除こうとするができないでいることが吐露されている。両者は魯迅の中の「鬼魂」が發する憎むべき「氣」である。魯迅における「鬼魂」は何よりも彼自身にも浸透している「傳統の鬼魂」であつた。したがつて彼の「傳統の否定」はいきおい「自己の否定」を含まざるを得ず、その「進化論」は、子供の世代の解放のためにすすんでわが身を獻げる「自己犠牲」を内容とすることになつたのである。しかし彼の「進化論」は一九二四年ごろからしだいに行きづまりを露呈し、「獻身」にたいするたび重なる「裏切り」は、魯迅の精神を深く傷つけ、彼の内部の「人道主義」と「個人主義」の矛盾を激化させていく(『兩地書』二四頁、一九二五)。彼は現實の鬭争の中に身を置きながら、一方で内面における激しい葛藤、精神の「彷徨」を経験しなければならなかつた。散文詩「墓碣文」(一九二五)は、彼の自己解剖を、「長蛇」と化し、毒牙によつてわが身を噛む「遊魂」のイメージで語っている。

魯迅の「個人主義」は復讐、殺人、自殺などの自己破壊的、攻撃的な衝動から退嬰や隱遁などの消極的な自己保存までさまざまな形で現れうる多層的な思想である。その復讐もまた血の拒否による實踐者の觀察にたいする復讐(『復讐』一、一九二四)や、自分たちの贖罪者に磔刑と譏笑で報いる者たちにたいする贖罪者の憐憫と呪咀(『復讐』二、一九二四)などの多彩なイメージをとどめたあと、やがて「孤獨者」(一九二五)では知識人魏蓮女が追いつめられたはてに軍閥の顧問となり、倒錯した復讐に身をゆだねて自滅する姿が描かれる。このような

復讐も、魯迅自身の内部につきあける「個人主義」の暗い衝動を析出したものであつた。だが魯迅は、この作品の末尾で魏蓮女の復讐が現實にたいし何らの變更も加え得ないことを描いている。それは魯迅におけるセヴィリオフ的な復讐への訣別を意味する。このような精神の運動にともなつて、「毒氣」と「鬼氣」の現れとしての「毒蛇」や「怨魂」は、あるときは愛しつづけ、愛しぬく持續的な「愛」、あるときは屍の林にのたうち、暗黒の中を奔る「眞の憤怒」の象徴となり(『雜感』前出)、「黒い惡鬼」は「正人君子」たちの前に立ちふさがるたにかいのイメージともなる(『兩地書』九三頁、一九二六)。魯迅自身の「鬼魂」がその兩義性をあらわにしてくることになる。「墳」の後に記す(前出)は、魯迅における「鬼魂」の一つの到達點をも示している。

最近、上海でだされているある雜誌を見ていたら、そこにも、りっぱな白話文を書くには、りっぱな古文を讀まなければならぬと書いてあつて、しかも證據としてあげてある人名の中に、私の名があつた。それを見て私はぞつと身ぶるいした。他人はともかく、私自身についていえば、過去に多くの古書を讀んだことは確かだ。教師とし今でも讀んでいる。そのため耳と目に染みついて、私のつくる白話文にまで影響し、どうしても文語的な言い回しや文體が出てしまうのである。だが、私自身はこれら古い鬼魂を背負つて逃れられないのが苦しく、たえず息がつかまるような重苦しさを感じている。思想上も、少なからず莊周・韓非の毒にあたつていて、時にひどく氣まま、時にひどく苛酷である。孔・孟の書はもっとも早くから、もっともよく讀んだが、どうも私とは無關係だつたようだ。

おおかた怠惰のせいであらうが、しばしば次のように思つて自

分を慰めてみる。いっさいの事物は、轉換の中では、多少ともどつちつかずの中間物を出現させるものだ、と。動物と植物のあいだ、無脊椎動物と脊椎動物のあいだには、いずれも中間物が存在する。あるいは進化の鎖の上では、すべてが中間物といえるかもしれない。最初、文章を改革するとき、何人かの得體の知れぬ作者が生れるのは當然である。それはやむをえないことだし、必要なことでもある。彼の任務は、目覺めたのち、一つの新しい聲をあげることだ。また、古い陣營から出てきたので、事情が比較的良好に分かるから、戈をもちかえて一撃すれば、強敵の死命を制することもむずかしくはないのである。だが、やはり時日の経過とともに過ぎ去り、だんだんと消えていくべきものであることはいうまでもない。せいぜい橋梁をつくる一木一石にすぎず、前途の目標や模範などにはなりえないのである。

「文語的な言い回しや文體」は一つのすぐれた比喩でもある。魯迅は、この文章のやや後で述べるように、古い書物に書かれた憎むべき思想、いい換えれば傳統からひきついだ「古い鬼魂」が心中に否定しがたく存在するのを呪咀しつつけた。だが、確かに阿片の害は阿片の吸飲者をもっともよく知るように、古い思想の害悪は古書を読んだ者をもっとも深く知り、それ故「子の矛を以て子の盾を攻むる」ことのできるのである（『古書と白話』、一九二〇）。轉換期における「中間物」としての冷靜な自己認識の成立は、道を探して苦しんだ魯迅にとって、はかり知れないほど重大な意味をもっている。このような自己認識が魯迅を、自ら舊陣營の急所を知る者としてすすんで反撃の武器となり、自身の「墳」への道を舊時代にとどめを刺し、これを葬る大道に重ねる相討ちの思想へとみちびいていったのである。このような自口

認識を語る文章が全體に悲哀の色を帯びるのは、いかんともしがたいことであつたが。

ただ黒い男が生み出されるにいたつた経路を、魯迅の精神史の中にさぐるとするならば、もう一つ「墳」の後に記す」の別の箇所にも注意する必要がある。

私の作品の讀者は、時どき批評して私の文章は眞實を語っているという。しかしこれは過褒である。……私はむろん人をあまり欺きたくはない。しかし心の中をそのとおりの盡くしたことはなく、大體は答案として提出できそうなところで止めている。私は確かにしょっちゅう他人を解剖する。しかしもっと多く、もつと容赦なく私自身を解剖する。少し發表しただけでもう溫暖を酷愛する人びとは冷酷だと感じてしまうほどだ。もし私の血肉を全部さらけ出してしまったら、末路はいったいどんなことになるだろうか。私は時どきそりやうって他人を遠ざけてしまいたいと思う。それでも私を唾棄しない人は、たとえ梟蛇鬼怪であっても私の友人である。これこそほんとうに友人である。もしそのような者もなかつたら、私一人でもよい。

ここに引用した部分のわかりにくさは、これが魯迅と許廣平との重大な愛情の機微を背景にしており、しかもそれを讀んだ許廣平がすぐさま魯迅への手紙の中で「放恣」な「自供」と評したような性格の文章であることによる（『兩地書』一一二頁、一九二七年一月七日）。つまり文中の「梟蛇鬼怪」は魯迅が許廣平を指していった語である。この一文で魯迅が自らの仕事を土工の仕事にたとえ、それが台を築いているのか穴を掘っているのか、いずれにしろ台であればそこから自分をつき落とすかその上で自分の老死を人目にさらすため、穴であればそこ

に自分を埋めるためにほかならないと述べた、その深い悲哀をはねかえすように、許廣平の手紙は、あなたが台を築くのはそこからころげ落ちるためでしょうか、そうとすればきつと誰かが押ししているのです、それがあなたの仇、つまり「梟蛇鬼怪」です、でも決して「友人」ではないからご用心ください、恐らく「梟蛇鬼怪」もあなたを傷つけてしまうことをよく知っているでしょうが、しかしあなたの仇であるからにはこの敵を捨てようがないのです、と書いてある(同)。それは「もしそのような者もなかったら、私一人でもいい」とためらいにとらえられた魯迅にたいする誇らかな挑戦であった。これにたいする魯迅の返信は、私は一人の人をもとめる、たとえ仇であり、敵であり、「梟蛇鬼怪」であつてもいい、私をつき落とすのであれば、甘んじてころげ落ちよう、名聲や地位など何もいらぬ、ただ「梟蛇鬼怪」さえいてくれれば十分だ、これをこそ「友人」と呼ぼう、と述べる。それはあたかも敗北の宣言である。この『兩地書』一一二信(二月一日)は、魯迅が自他にたいするさまざまの願慮やためらいや恥の意識をようやく捨てて、自分が「それほどおとしめるべき人間ではない」と信ずるようになり、「私は愛することができると、許廣平との結合へ最終的に踏み切るにいたった手紙である。「私は梟蛇鬼怪を愛す。私は彼に私を踏みつける特権を與える」という語は、さすがに『兩地書』公刊にさいして削除されたが、いっそう「放恣」な愛情の宣言であつた。

魯迅が許廣平との結合に最終的に踏みきるには少なくとも二つの重大な壁があつた。それはいづれも魯迅における「人道主義」と「個人主義」の激しい矛盾として現れた。第一は妻朱安との生活が「そのまゝ連れそつて一生を犠牲にし、四千年の古い帳簿に決算をつける」

『隨感錄』四十、一九一九」という魯迅自身の「進化論」の實踐にはかならなかつたこと、しかも新しい選擇によつて魯迅のたたかひの社會的地盤(名聲・地位)が崩されてしまふ危険があつたからである。第二は十七歳年上の、妻帯者である魯迅が、許廣平を自分との共同生活に引き入れることが、彼女を辱かしめ(辱没)、一九二九年二月三日付章素園あて書信、彼女に犠牲をしいる(『兩地書』七九信)ことになることへの恐れである。

第一の壁は、あなたの苦痛は舊社會のために自分を犠牲にしているところからくる、あなたは舊社會の苦痛の遺産に反對しながら、それを捨てたら舊社會に身を置くことができなくなることを恐れ、一生農奴の生活に甘んじようとしているが、私たちも人であり、誰も私たちだけに苦痛をなめさせる權利はない、私たちは生きてゐるかぎり、人事を盡くし、生活をもとめていけばいいのです(『兩地書』八二)という明快な論理と決斷によつて破られた。第二の壁もまた折しも魯迅の獻身を裏切る若い文學者の行爲が深く彼を傷つけ、彼の「進化論」への反省を促すとともに、その「個人主義」への傾斜をつよめ、かつての魯迅のように「自ら甘んじてなる犠牲は犠牲ではない」と斷言し、同時に犠牲が相互的なものとならざるをえないことを指摘する許廣平によつて突き崩されることになる(『兩地書』九二、九五、一一一)。

「梟蛇鬼怪」がなぜ許廣平を指している語になつたかは明白ではない。ただ一九二五年三月當時北京女師大の學生であつた彼女が初めて魯迅に手紙を送つたころ自稱して「小鬼」を用いたことと關係があるかもしれない。許廣平が魯迅の時間に闖入し、攪亂することをわびつつ自分を「小鬼」と呼んだのは、第一信において今日の青年が「九層地獄」に墮ちた存在であることを訴えて一人の「鬼魂」「靈魂」の救

出をもとめたことによるものである(この部分は『兩地書』では削除)。第七信でその後思いがけず數度にわたつて懇切な返信を得たよるこびを孟蘭盆の供養をたつぷり馳走になつた「小鬼」の満足にたとえていゝ。「小鬼」の呼稱は、許廣平が女師大闘争のリーダーとして劉和珍ら五人とともに退學處分になり、その通告が彼女たちを「害群之馬」に比したところから魯迅が彼女を「害馬」と呼ぶようになるまで、二人の間で用いられたものである。

二人はその後女師大闘争の中で急速に理解を深めていき、やがて相互の愛情を確認するにいたるが、「三・一八事件」を経て、一九二六年八月、二年後の再出發を約し、しばしの教職生活をそれぞれ厦門と廣州にもとめることになる。二人の書簡は當時魯迅自身その「進化論」がしだいに崩れていき、彼の内部の「人道主義」と「個人主義」の矛盾が激しく露呈してくる時代をむかえていたため、思想の劇としての豊富な内容をもっているが、それは一面で許廣平が「小鬼」から「害馬」に、そして「梟蛇鬼怪」に成長していく跡を示している。「梟蛇鬼怪」には、魯迅が許廣平の中に社會と人生にたいする自分と共通の意志と姿勢、もっとも根本的な「同行者」を見出した連帯の感情がこめられている。魯迅における相対ちの思想は、こうして一人の「同行者」を獲得し、黒い男と眉間尺の物語に結晶していくことになつたのである。

#### 四 奇怪な歌・團圓の舞

第一章で「鑄劍」成立の背景となつた大狀況を考え、第三章ではその小狀況つまり作者魯迅における主體的な内因について考察した。それでは物語に即して見るとき、黒い男とは何者か、物語の構造はどの

ようにとらえられるだろうか。この點に關しては、早く雪華氏によつて黒い男を「劍精」とする見解が提起されたが、その後野澤俊敬氏が黒い男は「雌雄の劍に肉體を引き裂かれた鐵の靈的存在」であり、この物語の底には「引き離された雌雄の二劍」の「求めあう力」が働き、その構造は作品の中に唱われる歌の中に「壓縮された形」で示されているという重要な推論を述べている。私自身もほぼ同様の考えをもつが、多少解釋の相異もあり、これまでの考察にしたがつてここで私なりの推論を試みることにしたい。

黒い男が刀工の鍛え上げた鐵の「精靈」であるとうかがわせるのは、野澤氏も指摘するように、「鐵のように」と二度にわたつて描かれる男の風貌である。鐵の「精靈」ならば確かに男が眉間尺を知っているように父親である刀工も知つていて何の不思議もない。ただ、その鐵は刀工によつて三年の精魂を傾けて鍛え上げられたものである。刀工の精魂のこめられた鐵の「精靈」は、同時にたたりを封じるために身首を離して埋められた刀工の「鬼魂」でもあると察せられる。そうであれば雌雄二口の劍は刀工の「鬼魂」の現身にほかならず、一口は多くの人間の血を吸い、罪で汚れ、一口は無垢のまま己れの血で自身の血を清める日を待つ、そのような事業が眉間尺に託されるのである。しかしこの事業のきわめて困難であることは、刀工の十分に知るところであつて、彼の「鬼魂」は自ら眉間尺の復讐に參與し、そのことによつて自らの運命の清算をくだるべく黒い男となつて現れなければならない。黒い男はそのような引き裂かれた「鬼魂」なのである。

魯迅が増田涉あて書信(前出)で「變挺な人間と首が歌ふものですかから我々の様な普通な人間には解り兼ねるはずです」(原文日本語)と述べた三篇の歌を見てみよう。第一篇は眉間尺の首と雌劍とをもつて王

城へ向う黒い男によつて唱われる。

ハハ愛よー愛よ愛よ。

青き劍を愛し、ひとりの仇（仇人）自ら首を刎ねる。

さても絶ゆることなき、ああ、あまたの暴君（一夫）。

暴君も愛す青き劍、ああ二ふりの青き劍よ（嗚呼不孤）。

首もて首に換え（頭換頭）、ふたりの仇自ら首を刎ねる。

されば暴君は消え失せ、ああ愛よオオ

愛よオオオオオオア

アアオオオオオオオ

「一夫」を『孟子』『梁惠王下』の用例にもとづいて暴君の意と取るのは多數説に従う。「孤ならず」は劍に雌雄の二口が存在することといい、「頭換頭」は、一人の復讐者が復讐を達成するために互いの首をさし出す意味と考える。全體として、二口の劍をめぐって復讐劇が展開し、眉間尺のほかに黒い男も自刎することが豫告される。ただ二人の復讐者がともに「仇人」と呼ばれているのはなぜか。彼らが王にとって「仇人」であることをいうのか。それとも二人が相互に「仇人」であることを表わすのか。先に引いた『兩地書』一一一信において許廣平が彼女自身を魯迅の「仇」（對手）であり「敵」であると述べているのを考えれば、後者の可能性も高い。そうであれば「仇人」にはひそかに魯迅と許廣平との愛が重ねられているのである。

第二篇は、王に金の鼎を用意させ、煮えたぎる湯の中に「秀でた眉

切れ長の眼、真白い齒、紅い唇、笑みをたたえた」眉間尺の首を投げ入れて唱う歌。

ハハ愛よー愛よ愛よ。

愛と血と、ああ誰か無からんや。

復讐と埋葬

民草は闇にさまよい、ああ暴君は高笑い。

彼は用う百の首、千の首、ああ萬の首。

我は用うひとつの首、ああ萬夫を用うる無し（無萬夫）。

我は愛すひとつの首、ああ血よオオ

血よオオオオオオア

アアオオオオオオオ

ここでは、愛と血は萬民にそなわっているのに、その愛は無視され、暴君の暴政は多くの犠牲によつて維持されていくこと、これにたいし黒い男の復讐は最少の犠牲によつてなしとげられようとする事、そして眉間尺への愛が唄われる。

第三篇は眉間尺の首が鼎の中をふちに沿つてゆつたりと回避したの

ち、不意に眼を見開き、眞黒な瞳を輝かせながら唱う歌。

王の恵み流れて、ああはてしなく廣がる。

敵を征ち、敵は征たれ、あつよいかな、つよいかな。

宇宙は窮まり有るとも、ああ萬壽は限り無し。

幸いに我は來たれり、ああ青きその光。

青きその光、ああ永遠に忘れず。

引き離されたる青き劍（異處異處）、ああ堂々たるかな。

堂々たるかなやアイアイヨウ

いざ歸れ、我がもとに來たれ、青きその光。

前半は王の威稜と恩澤を頌えて王を誘う歌、後半になると眉間尺の到來は雄劍が分身である雌劍をもとめてようやくにやつて來たことを意味することが明らかにされ、忘れることのできない愛（それはすなわち憎でもあった）が語られる。ここにおいてこの復讐劇が「分裂」と「圓圖」の物語であることが判明する。「異處」とは「身首異處」の「異處」

であり、雌劍と雄劍の分裂を指す。その分裂は刀工の「鬼魂」の分裂でもある。したがって黒い男すなわち刀工の「鬼魂」の復讐は二口の劍を合體させることによつてはじめて實現する。眉間尺は父刀工の復讐を果たすために雄劍を代表し、雌劍の歸來を促すのである。それはそのまま王の首への誘いを意味する。眉間尺の首はいくともとんぼ返りを打つたのち昇降をくり返し、美しい眼差しを送り唱いつづけるが、やがて唄いながら底に沈み、歌詞も聞き取れなくなり、遠くからは何も見えなくなる。しびれを切らした王に、黒い男は水底で「團圓の舞」がはじまったことを告げる。王が鼎に近づいたとき、男は王の首にさつと劍を當てる。二つの首の間に激しい噛み合いがはじまり、やがて狡猾な王の首が眉間尺のぼんのくぼに深く噛みついたとき、黒い男も自分の首に劍を當てる。三つの首のくり廣げる凄絶なたたかひの最後は次のように結ばれる。

黒い男と眉間尺の首もゆっくりと口を閉じ、王の首から離れ、鼎の壁に沿つて一周した。彼が死んだふりをしてゐるのか、ほんとうに死んでゐるのかを確かめるためである。王の首が確かにことされてゐるのを知ると、四つの目は相見つかすかに一笑した。そして靜かに目を閉じ、天を仰ぎながら、水底に沈んでいった。

最終節では、三つの頭蓋骨を判別できず狼狽する王后王妃たちと、困惑しながら長い評定にふける臣下たちの姿が描かれる。彼らのたどりついた結論は三つの頭蓋骨を王の身體といっしょに金棺に納め、埋葬することであつた。こうして王の權威は無意味化される。棺を送りながら泣くばかりの王后や王妃たち、外見だけは悲しげな臣下たち。「だが民衆はもう彼らを見ようとはしなかつた。行列も右往左往して見られたさまでなかつた」という結末は、何らの前途を示していな

い。しかし復讐は果たされたわけである。「鑄劍」の完成後十日ほどして、中國現代史は空前の虐殺事件をむかえ、魯迅は小論の冒頭に掲げた『華蓋集續編』校記をこの年に書いた雜文集の巻頭に再び收め、雜文集の表題も『而已集』と定めることになるのであるが、魯迅自身の「墳」にいたる實存的な覺悟がこの作品で定まったことの意味はきわめて大きかつたといわねばならない。魯迅は困難と危険に満ちた「彷徨」を生きぬいて改めて新しい出發の歌を唱うことができたのである。

注

(1) 孟廣來、韓日新編『故事新編』研究資料(山東文藝出版社、一九八四)「序言」。ただし兩氏がその根據をのこされてゐる魯迅手稿の第二節末尾に(未完)と書かれてゐるのにもとめるのは誤りである。第四節末尾には(完)と書かれており、ともに雜誌『莽原』に二回に分けて掲載したことから付けたものである。

(2) 藤井省三「魯迅の童話的作品群をめぐつて——『鬼と猫』あひるの喜劇・鑄劍』小論』(『櫻美林大學中國文學論叢』十三、一九八七)。

(3) 干寶撰『搜神記』(中華書局、一九七九)「出版説明」その他参照。

(4) 細谷正子「魯迅『鑄劍』について」(『京都女子大學人文社會學會人文論叢』二五、一九七七)。

(5) 「眉間尺物語」の變遷については、細谷草子「干將莫邪説話の展開」(東北大學文學部『文化』三三—三、一九七〇)、高橋稔「眉間尺故事——中國古代の民間傳承」(伊藤漱平編『中國の古典文學』、東京大學出版會、一九八一)、李劍國輯釋『唐前志怪小説輯釋』(上海古籍出版社、一九八六)参照。

なお、工藤貴正氏は一連の論文で、魯迅が翻譯したエーゼンの小説『小

きなヨハネス」が黒い男のイメージ形成に影響を与えたことを指摘している。同氏「翻譯『小さなヨハン』の『鑄劍』への影響」(『中國文藝研究會會報』四五、一九八四)、「魯迅の翻譯『小さなヨハネス』について——『夢』と『死』の世界」(大阪外國語大學修士會「外國語・外國文學」九、一九八五)、「魯迅『鑄劍』について——『黒色人』の人物像に見る「影」のイメージ」(『相浦泉先生追悼中國文學論集』、一九九二)。

(6) 許廣平「魯迅和青年們」(『許廣平憶魯迅』、廣東人民出版社、一九七九)。

(7) 姜德明「魯迅與貓頭鷹」(『活的魯迅』、上海文藝出版社、一九八六) 參照。『墳』の裝丁用に魯迅が準備した多くの圖案が二種のことである。

(8) 木山英雄「莊周韓非の毒」(『橋論叢』六九—四、一九七三) 參照。

(9) 拙稿「頽れいく『進化論』——魯迅『死火』と『頽れおちる線の顔え』」(『東洋文化研究所紀要』一一七、一九九二)。

(10) 王得后『兩地書』研究(天津人民出版社、一九八二)は一節を當て『兩地書』に見られる「犧牲論」の考察を行なっている。『兩地書』原信については同書及び『魯迅景宋通信集』(湖南人民出版社、一九八四)、許廣平の傳記については、陳漱渝『許廣平の一生』(天津人民出版社、一九八一)參照。

なお、許廣平と「鑄劍」の關連については、山田敏三「魯迅と中國古典研究(下の一)——厦門と廣州のころ」(『未名』四、一九八三)が、作品中の歌詞に作者の「許廣平との再出發を高らかに宣言する意志」を見る見解を提出している。また木山英雄譯「鑄劍」(『魯迅全集』三、學習研究社、一九八五)譯注が、「黒い男と眉間尺との間の信頼と連帯が、あるいは復讐の情熱自體が、一種の性愛にまで昇揚するかのおもむきを呈している」ことを指摘する。

(11) 雪草「關於『故事新編』」(『魯迅散論』、新文藝出版社、一九五二)。

(12) 野澤俊敏「變誕な人間と首の歌について——『鑄劍』挿入歌雜考」(『熱

復讐と埋葬

風』七、一九七八)。

(13) 許廣平の詩「爲了愛」の第二連に「我們的に換着心／爲人類工作／携手偕行」(前掲『許廣平の一生』より轉引)とある。「頭換頭」と「心換心」は語法的には一致するものと思われる。

(14) すでに挙げたものを除き、わが國の「鑄劍」關係論文で参考にした文献は次のとおり。伊藤正文「『鑄劍』論」(『近代』十五、一九五六)、立間祥介「『黒い男』と魯迅」(『北斗』十一、一九五六)、高島穰「盜跖と宴之敖者と」(同)、岡崎俊夫「魯迅の鬼氣」(『北斗』三二、一九五七)、高田淳「魯迅の『復讐』について——『野草』「復讐」論として、併せて魯迅のキリスト教論について」(『東京女子大學論集』一八一、一九六七)、駒田信二「魯迅の『鑄劍』について」(『谿の思想——中國と日本のあいだ』、勁草書房、一九八〇)、林田愼之助「復讐奇譚の取材源——『故事新編』の「鑄劍」」(『魯迅のなかの古典』、創文社、一九八一)。

これらの中で高島氏のものが、「『墳』の後に記す」にいう「鼻蛇鬼怪」を「眉間尺」に擬している。

なお、小論の基本的構想は拙著「魯迅——花のため腐草となる」(『集英社』一九八五)第八章において概略的に述べた「鑄劍」論を踏襲する。また拙著「魯迅」「人」「鬼」の葛藤(岩波書店、一九九三)終章につづくものでもある。ただし前者において『兩地書』で許廣平が自稱として用いた「小鬼」を元來閻羅王の部下の鬼卒の意としたのは誤りである。